

特別講演 1

「漢方はなぜ有効なのか “東洋医学の魅力について”」

沖縄小児発達センター小児科

竹谷 徳雄 先生

西洋医学を学んだ者にとってショックなのは、「近代医学を適応しても、80%の患者は別に良くも悪くもならず、あるいは自然に落ち着くところに落ち着く。医師の働きは、それが有害でない限り、これらの原則的な経過に影響するところはない。10%をやや上回る症例においては、確かに医療的な介入が劇的な成功をみせている。ただし残り7～8%は、医師の診断や治療が適切でなかったために不幸な結果をまねいている」と述べている“New England Journal of Medicine”の編集長・Ingelfingerの言葉である。診療科によっては反論があろうかと思いますが、内科系の医師にとっては経験を積みば積むほど実感として感じられるのではないのでしょうか。限界を感じ、より良い医療を模索する中でたどり着く一つが漢方医学ではないかと思います。

東洋医学の根底には“自然治癒力”への強い信頼があります。西洋医学ではタブー視していますが、治療効果を評価する二重盲検試験での“プラセボ（偽薬）効果”は自然治癒力の純粋な表現そのもので、無視することができない重要な作用です。薬とは薬効以前に、患者さんに投薬しているというコミュニケーションの一部であって、薬だけが唯一の回復因子ではないことを認識する必要があります。

患者さんの示す症状の中には自然治癒力の現われと考えられるものが多く、それをどう把握するかということが問題です。侵襲・ストレスに対する代償反応の示す症状の程度を見極め、生理的状态へいかに収斂していくか、その振動の幅を調和的に治めていく治療が重要になります。漢方にはその症候学とその治療となる方剤が用意されていると思います。

漢方薬は多成分系の薬剤で、薬効を単一成分に帰することはできません。共存している他の成分を併せた総合的な作用として、双方向のベクトルを持つユニークな特徴を有していて、その分毒性や副作用も少なくなっています。疾病は体内のシステムの

反応の異常であり、部品の故障ではないので、システムの異常にはチームで対応するというのが、漢方の立場です。そして、方剤の効果は生体の、ある合目的性を持った選択性に委ねられている。つまり、薬の方が主役で攻めていく様式から→生体が薬のある部分を活用するというような視点に移って行くことになり、自然治癒力の働きを上手く利用する形で作用していると考えられます。

以上のようなすばらしい漢方医学の特質を、最近の医学の進歩から考察し、経験、治療法を述べたいと思います。